

ピアノを教える人、学ぶ人の雑誌

ムジカノヴァ

MUSICA NOVA

2015
January

特集
新年号特別企画

考えよう！ ピアノ教育界活性化

今月の1曲

ギロック 手品師

連載

音楽ミュージアム (湯浅玲子)
ピアノの先生コミュニティ訪問 ほか

付録

作曲家カード②-5



通訳—富樫多紀
写真提供—サントリーホール

音楽は、すばらしい “学び”のツール

元ロンドン交響楽団ヴァイオリン奏者、元英国ロイヤル・オペラ・ハウス教育部長

マイケル・スペンサー

「創造性というのは、
とっ散らかっているものです」

「私は、日本の音楽の教科書も学習指導要領も読みました。日本でどんな教育が行われているか知らなければ、日本の教育に足を踏み込むのは恐れ多い気がしたからです。古い曲が多く、歌をメインに教えていて、その歌はどれも似通った曲調のように感じました。

音楽には楽しみという要素もありますけれど、私は音楽には人生の深い学びがあると思っています」

そう語るのは、英国から活躍の場を世界へと広げている音楽家でファシリテーターのマイケル・スペンサー氏だ。

ファシリテーターとは、ワークショップやミーティングなどにおいて、参加者の心情や状況などを見ながらプログラムを進行していく人のこと。スペンサー氏は、1999年から日本フィルハーモニー交響楽団と様々な教育プログラムを継続的に開催するとともに、子どもはもちろんのこと、教員や音大生などを対象としたイベントを実施し、日本でも注目を集めてきた。

最近では2014年10月、「アークヒルズ音楽週間2014」

(主催:サントリーホール/森ビル株式会社)で、日本フィルのメンバーとともに子ども向けのワークショップを開催し、好評を博した。

このとき氏が選んだ作品は、ロシア民話に基づくストラヴィンスキー《兵士の物語》。サントリーホール前の広場に行くと、すでにあちこちで子どもたちが日本フィルのメンバーと話をしていた。開始を知らせる合図はなく、自然な形で演奏がスタート。スペンサー氏が背負っていたリュックが兵士の人形に早変わりするなど、趣向を凝らした演出で子どもたちを惹きつける。質問を投げかけたり、一緒に歌ったり踊ったり。約1時間半のプログラムで、子どもたちは曲の歴史的背景や構造などを学んでいった。

スペンサー氏が目指す音楽教育とは? ワークショップを終えた氏に話をうかがった。

「18世紀くらいまでは、鍵盤楽器もアンサンブルの一員でした。ヴァイオリンでハーモニーを作るには複数の楽器が必要になります。でも、ピアノはひとりでハーモニーを奏でられる。それは素晴らしいことですが、その特性ゆえ、ピアノだけが音楽史上、独自の道を歩んだな、という印象はあります。

音楽は、人と人との関係性の中に存在しているソーシャルなもので、その関係は、何百万年も前から続いてきました。音楽には主に、宗教的なもの、エンターテインメント的要素を持ったもの、そして、生活から生まれた民謡の3つがあります。民謡の多くは、人と人との繋がりの中に存在している。でも今は、その部分が忘れられがちな気がします。だから私は、ワークショップのときには、人と人との関係性を築くことができるかどうか、という視点で作品を選んでいきます。

以前、日本フィルで行ったワークショップで、私はストラヴィンスキーの《春の祭典》を選びました。子どもには難しすぎるのではないかと驚かれました。でも、楽器は使いましたが、技術を求めているわけではありません。子どもたちがアイデアを出し合って音楽を作っていくことで、ストラヴィンスキーの作曲の過程を辿ることが目的でした。この試みで、子どもたちは音楽の構造をしっかり理解してくれました。

即興というと、躊躇する方が多いですね。でも、そもそも即興は、子どもたちがごく自然にやっていることです。ピアノの蓋をあけて、子どもをその前に放っておけば、好き勝手に音を出して遊び始めます。これが創作の



アークヒルズ音楽週間 2014「マイケル・スペンサーと日本フィルの音楽たんけん団〈兵士、ヴァイオリン、魔法の本の物語〉」終演後、出演者全員で
写真提供-富樫多紀

始まりです。創造性というのは、とっ散らかっているものなんです。とかく人はそれを怖がります。でも、子どもたちを信じることです。そして、彼らに間違えることに対する恐怖心を抱かせないようにする。こうして良い学びの環境を作ることが、一番大切だと思っています。

ラヴェルの《マ・メール・ロワ》は、私が好んで取り上げる作品のひとつです。素晴らしい物語に基づいて書かれていること、ラヴェル自身がオーケストラ用に編曲していることが魅力です。ソナタを取り上げるときには、構成に目を向けたプログラムを組みます。メシアン《鳥の歌》なら、メシアンと同じようにピアノで鳥の声を表現することができます。

今回取り上げたストラヴィンスキーの《兵士の物語》を、もしピアノ教室で鑑賞するなら、例えば、人が歩いている様子をピアノでどうやって表現するか・・・『疲れているのかな? それともスキップしているのかな?』『どう演奏したら、その違いが感じられるかな?』と、子どもたちにいろいろ質問していけば、音色やタッチを意識できるようになるでしょう。『ここは、さっきの雰囲気と、どう変わった?』と、前の部分を思い出させる質問をして、それを子どもの中に記憶させていけば、音楽の構成を意識することにつながります。3、4人の子どもで1台のピアノの周りを囲んで取り組めば、ピアノ教室でのソーシャルな活動につながっていきますね」



マイケル・スペンサー

Michael Spencer ●元ロンドン交響楽団ヴァイオリン奏者、元英国ロイヤル・オペラ・ハウス教育部長。世界各地で教育・地域・人材育成プログラムを開発・実践し、高い評価を得る。日本でも15年前より、プロオーケストラと教育プログラムを実施。『ピーターと狼』（2008年アカデミー賞（短編アニメ部門）受賞）の教育ディレクター。2013年より上野学園大学で「音楽ワークショップ・ファシリテーター養成講座」を日本で初開催し、注目を浴びる。同大学客員教授。日本フィルハーモニー交響楽団コミュニケーション・ディレクター。

写真提供-日本フィルハーモニー交響楽団

今の子どもたちに 音楽で何を伝えるか？

「ワークショップを日本でやり始めてしばらく経ったころ、私は西洋と東洋ではアートに対する根本的な考え方が違うことがわかり、ワークショップでの伝え方を全く変えました。

西洋ではギリシャ時代のソクラテスの弁証法、つまり異なる2つの考え方を互いに展開して、新たな考えに達する、まさにソナタ形式がそうですが、これが西洋音楽の基礎となっています。それに対して日本は、周囲と合わせる、つまり調和を求める孔子の儒教的な思考が文化の背景にあります。そのような背景の中、日本では繰り返し学ぶことで技術を磨くことに価値が置かれた。今も学校の教育においては、歌や楽器の演奏技術の取得に力が注がれている印象を受けます。

今、子どもたちが学んでいる音楽のほとんどは、教会や王侯貴族に代わって台頭してきた裕福な市民が、個人の考えを追い求め始めた時代の作品です。なのに、その音楽が生まれるに至った背景を知らないまま、音楽だけに目を向けている。

こういった異なる背景を理解して、西洋の文化を取り入れるには、私は弁証法的な対話による分析が必要だと思っています。

音楽はテクニックと感情の2つの要素を結び付けてくれる素晴らしいものです。鑑賞する意味のひとつに、そ

の音楽がどういうふうになり立っているかを理解する、という目的があります。でも、こう感じるべきだと、感情を押しつけることはできません。例えば、『納豆、好きですか?』と聞いて、相手が『嫌い』と答えたら、『健康にいいですよ』といろいろ説明することはできても、その人に納豆が好きだという感情を抱かせることは無理です。

音楽の鑑賞においても、音楽は子どもたちが物事を分析するためのツールになればいいと思っています。今は子どもたちの学習法が急激に変化しています。ハイスピードなグローバル化の時代を生きていくには、子どもたちはさまざまな学び方を身につけ、柔軟性、創造性を養っていく必要があります。それこそが今の子どもたちに教えるべき技術だと私は思います。

音楽を使って、それをどう教えていくか。その方法はいろいろあります。ピアノにもまだまだ可能性が秘められています。

日本フィルの東京定期演奏会での『オケのテイキは、おもしろい』のウェブ版連載、『Mike-san's Music Notes (マイクさんのミュージック・ノート)』には、いろいろなやり方を考えるヒントとなる素材が入っています。ぜひ参考にしてください。

私はピアノを弾くことは好きですが、子どものころ、学ぶ機会がなかったので、それを今、とても残念に思っています。15年くらい前、『人生でやったことがないのは、なんだろう』と思い、日本語とピアノの勉強を始めることにしたんです。

ピアノをどんなふうに進めようかと考え、バッハの《平均律》を選びました。パソコンのタイピングで指は鍛えているので、目と身体の使い方、自分のやりたいことの指への指示系統を明確にさせることから始めました。ただ《平均律》には鍵盤上を左右に大きく飛び交う動きはないので、ジャズの楽譜を買って弾いてみました。頭をいっぱい使えて、楽しかったですよ。ピアノを始めようと決断した理由のひとつに、ジャズのコード進行を目ではなく直接感じたい、という思いもあったのです」

ピアノを学び始めてからのことを、本当に楽しそうに話すスペンサー氏。自分は何をしたいのか。そのためには、何をしたらいいのか。自身のピアノ学習法の話ひとつからも、氏がなぜ、次々とユニークなアイデアを提示し続けられるのか、その理由がみてとれたような気がした。